

JEACS

福音讃美歌 ジャーナル

2018.11 vol.26

Japan Evangelical Association
for Congregational Singing

第二回 福音讃美歌協会・讃美歌作家懇談会発題

2018年9月10日（月）午後6時半～8時半 OCC 612号室

■作曲の武義和さん（土浦めぐみ教会音楽主事）

高校生の時、すっかり讃美歌にはまって、1番から567番までの譜面をほとんど覚えました。高校三年の時、父の友人の音楽家、唐津東流先生を訪ねて「讃美歌を作りたいけれど、どうしたらよいですか」と尋ねました。先生はちょっと考えて「讃美歌だけしかできない人になるのではなく、オーケストラの譜面を書く力を付け、その上で讃美歌を作りなさい。キリスト教音楽の世界では、それほどの実力も無いのに大先生になってしまう人がいる。そういう人にならないように」と言って、音大で学ぶことを勧めてくださいました。音大の作曲科に入るには、多少の作曲の他に、対位法と和声学もできないといけない。それで初めて和声学の教科書を開いたとき驚きました。半分ぐらいまでは、ことばは分からなくても、ほとんどが讃美歌で見て、知っていることだったんです。『讃美歌』でも『聖歌』でも、あれは和声学などのエッセンスが詰まった教科書と言えると思います。また四声体の聴音、四つの音を聴いて書いていく試験ですが、そこでも讃美歌が役立ちました。ところが、音大に入った後が大変でした。周りの人がみんな天才に見え、毎日うつむくような日々が続いて、とうとう学校に行けなくなるんです。その時、一人の先生が私を呼んでくれました。神様が本当に私を助けてくださる時が人生にはあって、その時には分からなくても、後で振り返ると、あの時、神様が救いの手を差し伸べてくださっていたという時があります。この時がまさにそうでした。その先生が私を呼んで、いろいろ聞いてくださって、私は、自分には才能がないし、この世界のことは知らないし、ピアノも上手く弾けない、ということを話しました。その頃の作曲科の学生の間では、前衛的な現代音楽が主流でしたが、その良さが私にはどうしても分からないのも悩みでした。すると、先生は「君は他の人と比べるんじゃなくて、君の求めている音楽を求めたら良いのではないか」と言われて、前に日本語による讃美の歌を作りたいと思って音楽を志したことを思い出したんです。音大の流れの中で忘れていたそのことを思い出して、「そうだこの世界で生きよう、私は私なりに讃美歌を作ろう」と思い至るようになりました。家に帰って「信徒の友」という雑誌を開いたら、その讃美歌投稿欄に、水野源三さんの

CONTENTS

- ・第二回・讃美歌作家懇談会発題 1
- ・編集作業の道のり 第11回 土井康司 5
- ・本「子どもの賛美歌ものがたり」 6

Page

詩があったんです。その時に作曲したのが「主から受けし」という曲です。20代の時、この曲を書かせていただいて、その後、海老原さんや天田先生などと一緒に「キリスト教教会音楽創作の集い」という会に出て、いろいろ批評していただいたこともありました。もう40年ぐらい前の話ですね。

作曲することの中で三つのことを考えています。まず、水野さんが亡くなられたこともあって、詩人の詩にではなく、みことばに曲を付けることが多くなりました。しかし、みことばに曲を付けることは非常に畏れ多いことです。貧しい自分の色に、このみことばを染めて良いのだろうか、という畏れがいつもあります。それでも、務めは果たしますが、畏れつつみことばに曲を付けさせていただくということがひとつ。

二番目に、難しい曲ではなく、誰にでも歌える曲、聖歌隊の人が簡単にハモれる曲を作っていくと、これは私が作曲しているのだろうか、という気持ちになることがあります。もともと和声学の世界では、こうすれば美しく響くという理論があって、自分はそれをただそこに持ってきているだけではないか、つまり、和声学という神様が造られた素晴らしい音の理論の世界を、私が借りて日本の言葉を付けているだけではないかと思うことが、最近よくあります。つまり、私は作曲家ではなくて、借りているだけの借曲家（しゃっきょくか）ではないか。その気持ちは分かっていたいただけたかなと思います。

三番目は、日本語には日本語に合ったメロディーがあります。最近、私は主任牧師から言われて、「私について来なさい」と言う歌を作りました。作りながら気づいたことは、英語なら（口ずさみながら）「フォロー・ミー、フォロー・ミー」って作れるんです。日本語では「私について来なさい」としか作れないわけですが。でも、それは逆に考えれば、日本語には日本語の特質があって、それにあった曲を作っていくことが大切なのではないか、というようなことを考えています。

■作詞の中山信児さん（菅生キリスト教会牧師）

武さんのお話で心に残ったことがあります。借曲家という言葉ですが、借詩家とも言えると思いました。なぜかという、私たちの信仰のことばは、ほとんどがみことばから来ているからです。それを解釈したり敷衍したりするけれど、自分の中から自由にわき出てくることばが、そのまま讃美歌の歌詩詩になるということではない。ダドリー・スミスというイギリスの作詩家も、自由な詩想の翼を羽ばたかせても讃美歌はできない、ということを言っています。詩人だけが高みに登ってしまうと、会衆はついて行けません。讃美歌の公同性を考えると、讃美歌作家が会衆のレベルで会衆とともに考え、会衆が共有している、神学、ことば、信仰体験といったものを讃美歌のことばとして表現していくことが大事なのだろうと思います。

ところで、「福音讃美歌協会」とか『教会福音讃美歌』というときの「讃美歌」は「礼拝で会衆がともに歌う信仰の歌」という意味合いなのだ、ということ、今日のこの場では、共通理解として持っていたらと感謝です。それを土台に話したいと思います。では、礼拝って何だろうと考えたとき、本質論はさておき、日本の教会の礼拝の姿を見るだけでも、多様な教会があり、多様な礼拝がある。プレイズ&ワシップにシフトした礼拝からオーソドックスな礼拝まで、そして、そこで歌われる讃美歌にも大きな幅があります。また、集う会衆にも大きな多様性があります。老若男女、職業、教育、信仰、音楽の素養、一番やっかいな好み、そういう多様な人たちが、信仰によって一つに集まり「心をひとつにし、声を合わせて」一緒に歌っている。しかも、ほとんどが楽譜を読む訓練や声楽の訓練などは受けていない人たちです。この現実が、私たちが讃美歌を作り、讃美歌集を作る上でいつも意識してきたことでした。

そんな中で、公同性について考えると、聖書のことばの重要性に思い至るわけです。そして、みことばが伝わる分かりやすい詩を書きたいと願うわけですが、同時に、ただ平板で単調なものにならないようにも気をつけます。単純なことばが心を素通りしないために、何か、心にとどまる引っ掛かりを残したいのです。聖書には引っ掛かりのあることばが満ちています。「貧しい者の幸い」、「死ぬことは益」、「世の知恵の愚かさ」、そういった信仰のことばの引っ掛かりが、歌う人、聴く人の心に引っ掛かって、残るように表現することが、借詩家の務めではないかと思います。最後に、齋藤勇さんというクリスチャンの英文

学者が書かれた文章をご紹介しますと思います。

「明治 20 年代の青年詩人、すなわち、明治詩壇の主潮を作った人々に対して、作詩の刺激を与えたものは、明治 15 年初版の「新体詩抄」ではなく、「新撰讃美歌」・・・「小学唱歌」・・・「於母影」であろう。「新撰讃美歌」・・・は今までわが国の文学にまれであった敬虔に充ち、また絶対他者に対する信頼感をまったく新しく表現したもので、若い詩人の浪漫的なあこがれを呼びおこし・・・。」

このことばを一つの指針にしながら、これからも借詩に取り組んでいきたいと思っていますところ。

■作曲の海老原直秀さん（高座教会礼拝オルガニスト、田園伝道教会礼拝ピアニスト）

私は個人的に讃美歌を作曲してきたんですが、礼拝で会衆が歌う讃美歌がほとんど外国の歌で、日本人が作った讃美歌が非常に少ないことに気付かされました。そして、8 年前に作詩者、作曲者がディスカッションしながらグループで讃美歌を作る場として「賛美歌工房」をみんなで作りました。これは会衆讃美歌を作るとともに特化したグループですが、毎月 1 回例会をやって、この 9 月で 80 回になります。歌集も一つ出しました。私は讃美歌を作曲していますが、作曲をする場合、やはり良い詩が欲しい。詩を書く人がもっと欲しいです。礼拝讃美歌としてふさわしい、神への祈り、信仰の告白、隣人への証し、そういう歌詩を書いて欲しい。聖書からインスピレーションを得た、共同体としてふさわしい詩を書いて欲しいと願っています。

作詩者への具体的な願いとしては、二節三節ある有節詩の場合、重要なポイントで一節と二節のことばのアクセントが反対になると作曲しにくいですね。そうすると同一音で逃げるしかないですが、音楽的には単調になる。特に、重要なポイントでは各節のことばの高低アクセントを揃えて欲しいですね。

さて、この 15 ～ 20 年に各教派からいろんな讃美歌集が出版されています。賛美歌工房で数年前に讃美歌のテーマについて調査をしました。するとある特定のテーマについては、讃美歌が少ないことが分かってきました。日本人の作詩作曲も非常に少ない。これから讃美歌集を編集する場合、あるいは作詩作曲する場合、それについて歌っている讃美歌が少ないテーマに積極的に作詩作曲して行って、礼拝共同体の中で歌える会衆讃美歌を作っていくことが必要ではないかと感じました。

「賛美歌工房」で作られた作品の著作権は、それぞれの作者が持っているので、いろんな讃美歌集で使っていただきたいと思います。また、数年前に『新生讃美歌』を出したバプテスト連盟では、『新生讃美歌』が、どのように歌われ、どう思われているかを尋ねるため、全国のバプテスト連盟の信徒からアンケートをとり始めたようです。それを集計して、次の改訂に生かそうとしている。こういう現場の声をフィードバックしながら作っていく必要もあるんじゃないかと思います。

ところで、今月から、地域の人と知り合うために「みんなで歌おう会」を始めるんですが、そこで、誰でも知ってる日本の歌は何だろうと考えてみると、「ふるさと」や「椰子の実」の作者はクリスチャンなんです。他に 60、70 年代のフォークなども調べましたが、良い意味で、大衆、会衆が喜んで歌えるメロディー、日本語から自然に導き出されるメロディーがあるんですね。どんなに良い訳でも翻訳には限界が



あるんです。だから日本語を大事にして、日本語に合ったリズムとメロディで作曲したい。もうひとつは朗唱です。例えば詩篇などはことばが長いので、一部は朗唱にして、会衆が歌う答唱は普通に作曲して、ということも試みています。作詩者と作曲者が、現場の声をフィードバックしながら、協力してやっていくと、楽しいのではないかと思います。

■作詩の関根一夫さん (MACF 牧師)

高校生の時、中田羽後先生が教会に来て、ギターで『聖歌』429番の「九十九匹の羊は」を歌ったのを聴いて、メチャクチャ感動したんです。すぐに中田先生に「私もギターを弾きたい。ぜひ教えてください」と言ったら、先生が葉書二枚に歌詩とコードを書いて送ってくれました。二枚目の一番下に「これからのクリスチャン音楽家はギターを覚える必要がある。どこでも歌えるようになるためには300回は練習しないとダメだ」とあって、おまけに「君のような者は伝道者になるべきだ。伝道者は何でも食べられて、どこでも寝られないとダメだ」と書いてありました。大学時代は、学園紛争真っ只中で、学校が半分暇だったんで、PBAに遊びに行って、山内修一さんが作っていた『友よ歌おう』と一緒に考えたりしました。教会でもギターを弾いて歌いたかったんですが、当時、礼拝でギターを弾くことはほとんど御法度でした。でも、若かったこともあり、何人かで集まって、何となく自分の世代にはこういう形が良いんじゃないかとか考えていました。

大学が終わって、オーストラリアの聖書学校に行ったんですが、その頃、ニュージーランドでスクリプチュア・ソングというみことばに曲をつけた讃美が盛んで、それがオーストラリアにも飛び火して、聖書学校でもよく歌うようになりました。帰国してからはアメリカのマラナサの讃美歌を訳したりしました。「主イエスは僕の宝」は、当時オーストラリアで聴いた曲に、勝手に詩を付けたものです。

その後、小坂忠さんがクリスチャンになって、彼らと一緒にコンサートを手伝ったりもしました。そんな中で、22、3年前に岩渕まことさんとお話することがあって、彼が落ち込んでいた時期に「曲を作った方が良いよ」という話をして「曲作ればオレ詩書くから」とか言ったんです。そしたら「1000曲ぐらい行けるよね」という話になって、それがこの7月で250曲になりました。「ゴッド・ブレス・ユー」は書き始めて7番目の曲で、字余りだし、これがどうしてこんなに受けたのか、ちょっと分からない面があるんです。そんな中で、この20年間ぐらい、みんなで歌える歌、教会で歌える歌、しかも聖書に基づいて、神学をきちんと踏まえたものということで、楽しみながら作詩をずっと続けてきました。

中田羽後先生が編纂した『聖歌』の「まえがき」に、こんなことばが書いてあります。「神は、たしかに、クリスチャンの心に、常に、新しい歌を与えたもう。しかし、古い歌を、新しい感激をもって歌い得ることも、また、神の恵みである。古い、と言って軽視せず、新しい、と言って敬遠せず、歌い慣れた、と言って、そればかりに執着せず、かの演奏会歌手が、常に、その演奏曲目を広げることを怠らないように、クリスチャンも、また、その信仰の糧となる聖歌のレパートリーをふやすよう、心がけるべきではなかるうか」

私は、いろんな詩を書かせてもらって、岩渕さんが曲を作って、編曲者が編曲して、月に1回発表するんですが、それを聴いていると、自分で結構感動するんです。誰が作ったんだろうみたいな。自分が作ったことを忘れるんですね。詩は曲に乗った瞬間に、自分の手から離れると思います。本当に借詩、借曲という感じで、自分は神様が当てはめてくださるところに載せるだけで、神様がお用いくださると思うと、心も軽く一緒に歌える。キャンプとかで、前の団体がゴッド・ブレス・ユーを歌ってるのを聴くと良いなあと思うわけです。たまに「関根先生、ゴッド・ブレス・ユーって良いですよ、あれ岩渕さんが作ったんですよ」って言ってくれるわけです。私が作ったって知らないんです。ありがたいと思います。讃美歌ってそういうものだと思います。私が作ったって言うのは、恐らくヒット曲とかで讃美歌ではないんでしょう。神様に捧げたときには、心も一緒に手放して捧げられたものとして整えられていく、そういう意味では、歌いながら本当にひとりの人の出来事を越えて、神様に心が向けられるという詩がもっとできれば良いなあと思います。一応、岩渕さんとの1000曲の約束があるんで、あと750曲残っていて、この調子でいくとあと70年かかりますねと言われてますけど、何とかそれ以前に終わらせたいと思っています。

『教会福音讃美歌』編集作業の道のり 連載第 11 回

福音讃美歌協会 讃美歌委員 土井康司

「新しい歌を主に歌え。」(詩篇 33:3a)

前回ふれました『教会福音讃美歌』の編集における音楽面の作業について、補足してご紹介します。

■自由であること

讃美歌を吟味する時、歌詞の評価には聖書という基準があります。しかし音楽(旋律や編曲)については、聖書に指針となるような具体的な記述がありません。「暁の雌鹿」(詩篇 22 篇)、「遠くの人、もの言わぬ鳩」(詩篇 56 篇)など、魅力的な曲名は出てくるものの、それらの楽譜は聖書に載っていません。他のささげ物と同様、どんな音楽を献げるかよりも、どんな思いで献げるかを、主はご覧になるということでしょう。聖書に音楽についての縛りが無いことから、人は時代ごと、国や文化ごとに、たいへんバラエティーに富んだ音楽で、自由に主を讃美してきました。『教会福音讃美歌』の編集にあたって、音楽については偏見なく自由に採用しました。世界中の民謡や、クラシックの旋律など、讃美歌として作られた音楽ではなくても採用しています。

■伝統的であること

さて、基本は自由であっても、これまでの歴史の中で作られた膨大な数の讃美歌が残されており、それらの伝統を守り伝えることも大切です。そこで編集においては、世界中のおもだった讃美歌集を取り寄せて調査しました。日本の福音派が長く用いてきた『讃美歌』『聖歌』に掲載されている曲から採用する場合でも、それらが現在、世界ではどのように扱われているのか調査しました。『讃美歌』『聖歌』は 1950 年代に、当時の世界の讃美歌集から多くを採用し出版されました。それから時が経ちましたが、『讃美歌』『聖歌』ともタイムカプセルのように、出版当時の世界の讃美歌事情を保存してきました。しかし日本で歌い継いでいる間に、引用元である讃美歌集の方では音楽が更新されたものも多々あります。歴史の研究によって、あるいは時代の必要に応じて、旋律や編曲が修正されたり変更されたものがあるのです。それらもまた伝統であり、無視することはできません。『教会福音讃美歌』ではそれらの修正・変更を無条件に反映することはしませんでした。検討の結果、『讃美歌』『聖歌』と同じ曲でありながら旋律や編曲が異なっているものも、一部採用しました。歌い慣れている旋律と違っていても否定的に捉えず、「新しい歌」として用いていただければと思います。日本の伝統は『讃美歌』『聖歌』という形で皆さんの手元にあります。それに加えて、次世代のクリスチャンのために、現在の世界における讃美の状況を踏まえた音楽を、新たな選択肢として提供することにも意義があると考えています。

■普遍的であること

『教会福音讃美歌』は伝統を大切にする一方、比較的新しい讃美歌も評価し、採用しました。現代においては情報網の発達により、作られて間が無くても世界中で広く用いられるようになった讃美歌があります。それらの、既に世界的な普遍性を得ている讃美歌を日本に紹介することも、『教会福音讃美歌』の大切な役割と考えました。全世界で同じ「新しい歌」をもって讃美できたら素晴らしいことです。

以上のように『教会福音讃美歌』の編集において音楽は、自由を大前提としつつ、伝統という縦軸と、普遍という横軸を意識して評価されました。

■最後に

『教会福音讃美歌』に掲載されている楽譜は、そのままでは音楽ではありません。音楽の一部を書き留めたものに過ぎません。讃美歌は、歌われてこそ主へのささげ物となります。『教会福音讃美歌』では、義務教育の範囲で演奏できる楽譜を掲載しています。「演奏が難しい曲」はあっても、「演奏が不可能な曲」は掲載していません。知らない曲であっても敬遠せず、ゆっくりと 1 音 1 音を拾いながらも歌ってみる時、それこそ「新しい歌」が生まれる瞬間となります。教会の讃美が一層豊かになるために、『教会福音讃美歌』が用いられましたら幸いです。

本の 紹介

『子どもの賛美歌ものがたり イエスさまいるってほんとな』

大塚野百合著 教文館

これまでも讃美歌に関わるいろいろな「ものがたり」を書いてこられた大塚野百合氏による、こどもの讃美歌のものがたりです。ここには、英語から翻訳されたものが10曲、日本語で作られたものが7曲収められています。それぞれに、著者による解説や感想と、作詞者、作曲者の生い立ち、讃美歌が作られたときの様子が分かるエピソードなどが、エッセイ風にまとめられています。時に話が広がって、バックストンや水野源三、ナウエンまで出てくるのは自由なエッセイ仕立ての本書ならではの魅力でしょう。歌詞や楽譜も掲載されていますが、曲によっては楽譜の無いものもあります。嬉しいのは英語の歌詞に著者の私訳が付けられていることです。

讃美歌を翻訳するときには、楽譜に合わせてことばを切り詰めなければなりません。それは、英語の意味を良く噛みしめながら、その中心となる意味をすくい取るような作業になります。そのようにして意味をすくい取っ

ても、原詩の豊かさをすくい取るのは至難の業です。音符に縛られない自由詩的な私訳ならば、意味と豊かさを同時にすくい取ることができます。残念ながら、その私訳で歌うことはできませんが、一度、私訳を読んで原詩の豊かさに触れていると、その讃美歌を歌うときに、そこにあった豊かさを思い起こすことができます。著者による私訳は、美しく分かりやすいことばで丁寧に訳されています。

選ばれている讃美歌の中には、「いつくしみふかい」(『こどもさんびか改訂版』130番、『教会福音讃美歌』432番では「いつくしみ深き」)や「ガリラヤのかぜかおるおかで」(『こどもさんびか改訂版』54番、『教会福音讃美歌』183番)など、必ずしも子ども向けに作られたのではない讃美歌も含まれています。著者は「ガリラヤのかぜかおるおかで」の章で次のように書いています。「不思議な魅力をもつこの賛美歌は、多くの人々の心を魅了し・・・」(104頁)と。確かに、こどもの心に語りかけるのは理屈ではありません。讃美歌が多くの人に受け入れられるかどうか、歌い継がれるかどうかは、最終的にこの「不思議な魅力」があるかどうかにかかっていると言うことができるでしょう。

「きょうだいげんかを」という讃美歌の章には、作詞の阪田寛夫が、従兄の大中恩(おおなかめぐみ)の作曲について述べたことばが載っていました。この二人は、誰もが知っている童謡「サッチャン」の作者ですが、阪田は大中が自分の詞に曲を付けたとき、驚きをもって次のように述べています。「ふしぎなことに最初の一行を聴いた時から、私はこれを前以て知っていたような気がした。(中略)自分のことを言っておかしいけれども、これは作詞者も知らないで詞のなかに封じ込めているリズムと抑揚を外へひっぱり出して、魅力ある歌として定着する能力もしくは言語感覚を、作曲者が持っている証拠だろう」(137頁)。

これは、日本語による作詞と作曲の関係のえもいわれぬ機微を、丁寧に、そして適確に表現したことばです。このような素晴らしい歌詞と曲との出会いが讃美歌創作の現場にも多く生まれますように。



＊会計報告＊

■収入の部■

2018年4月～2018年9月

科 目	2018 年度予算	2018 年度中間報告
会員負担金	1,270,000	1,075,000
（正会員）	(750,000)	(750,000)
（準会員）	(120,000)	(120,000)
（賛助会員）	(400,000)	(205,000)
自由献金	600,000	145,020
積立金取り崩し	100,000	82,859
特別収入	150,000	0
その他	0	1
当年度収入合計（A）	2,120,000	1,302,880
前年度繰越金	516,985	516,985
収入合計（B）	2,636,985	1,819,865

■支出の部■

科 目	2018 年度予算	2018 年度中間報告
理事会費	95,000	53,682
委員会費	300,000	174,388
人件費	390,000	210,000
事務費	178,000	158,079
ジャーナル発行費	400,000	203,598
カンファレンス開催費	215,000	49,468
総会開催費	20,000	22,139
JEA 関係費	100,000	87,112
経常支出合計	1,698,000	958,466
特別支出 積立金	100,000	100,000
積立金取り崩し支出	100,000	82,859
予備費	222,000	20,681
当年度支出合計（C）	2,120,000	1,058,466
当年度収支差額（A）-（C）	0	244,414
繰越額／残高（B）-（C）	516,985	761,399

■賛助会費納入者・献金者一覧（2018年4月～2018年9月）

馬天キリスト教会、上作延キリスト教会、都賀キリスト教会、千歳烏山光の子聖書教会、菅生キリスト教会、キリスト教朝顔教会、福田崇・愛子、石川岩夫、南場安正、田辺勉、横倉知恵、藤本侃也、山村雅彦、北田直人、寺村秀嗣、中山信児、本間昭弘（賛助会費 17 件）

武蔵台キリスト福音教会、馬天キリスト教会、板橋キリスト教会、泉キリスト教会、本間昭弘、篠田安子、オーディオ・コンサート（いのちのことば社チャペル席上）
（献金者 7 件）

お名前の掲載を希望されない場合は、通信欄に匿名希望とお書きくださるか、メール（info@jeacs.org）で、その旨をお知らせください。

「オーディオ・コンサート」

♪「オーディオ・コンサート」を
あなたの教会で、開いてみませんか!?

福音讃美歌協会では、CD『教会福音讃美歌』全5巻の完成を記念して、「オーディオ・コンサート」を企画しました。「オーディオ・コンサート」は、教会で、講師の解説を聞きながらCD収録の讃美歌をオーディオで鑑賞する集会です。

■「オーディオ・コンサート」概要

1. オーディオ機器は、福音讃美歌協会でご用意したものをご利用いただくことができます。貸出費用（送料含む）は無料です。（下記「使用オーディオ機器」参照）
2. 実際にCD制作に関わった者が、教会のご希望をお聞きしながらCD収録曲から選曲し、当日会場に伺って解説をいたします（要日程調整）。
3. 講師謝礼（関東圏の場合交通費も）は不要です（関東以外の場合は応相談）。
4. 会場では、1枚2,700円（税込）のCD『教会福音讃美歌』1～5巻を、1枚2,500円（税込）で販売することができます。
5. 福音讃美歌協会の働きのために自由献金の機会をいただければ感謝です。



■使用オーディオ機器（プロケーブル社）

- スピーカー BIC DV62si（16.5cm ウーファー 2way 能率:90db アメリカ）
- パワーアンプ thomann S-75mk2（AB級アンプ 45ワット×2 ドイツ）
- 音源用ケーブル Neumann（ドイツ）



■お問い合わせ：下記、福音讃美歌協会（JEACS）まで。

■福音讃美歌協会◆会員募集◆

- ◇会員には次の三つの種別があります。正会員（教会、教団・教派等）、準会員（超教派団体、グループ等）賛助会員（趣旨に賛同し支援して下さる教会、個人等）
- ◇賛助会員のお申し込みは、入会申込書をご請求いただき、必要事項をご記入の上、郵便またはFAXでお送りください。承認の後、年会費のお振込みにより入会が完了いたします。
- ◇正会員、準会員のお申し込みにつきましては、協会へ直接お問い合わせください。

福音讃美歌協会（JEACS） 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル 602号室
Tel.03-5341-6920 Fax.03-5341-6921（いのちのことば社出版事業部内）
ホームページ <http://jeacs.org/> メール info@jeacs.org

◆郵便振替口座◆
番号 00220-1-95127
名称 福音讃美歌協会

◆郵便貯金口座◆
番号 10500-82654721
名称 福音讃美歌協会

◆みずほ銀行 ユーカリが丘支店◆
普通預金 番号 1604668
名称 福音讃美歌協会

From Editor

表紙の写真は、立教大学のスコット・ショウ先生が撮影されたソールズベリー大聖堂のステンドグラスです。美しい写真を、あらがとうございます。

第二回・讃美歌作家懇談会には、13名の讃美歌作家たちが集いました。日本では、讃美歌作家という肩書を使う方は、まだあまりおられません。それでも、あえてこの呼称を使うのは、将来、日本の教会に名実ともに讃美歌作家を肩書きにする人が現れ、教会がそれを支えるようになることを期待するからです。

今回は、関根一夫先生から、『聖歌』『インマヌエル讃美歌』等を編纂された中田羽後先生の興味深いエピソードをお聞きできたことが、大きな収穫でした。中田先生は招かれた特別集会で、ガットギターを借りて、アルペジオで伴奏しながら、『聖歌』の「九十九匹の羊は」（290）と「ああ恵み」（550）を歌われたそうです。関根先生は強烈な印象を受けて、その時「絶対ギターだ!」と思われたとのこと。中田先生はテノールだったということも、実際に聴いた先生から証言していただきました。中田先生が「信仰的に恵まれると声は高くなるんだ」という持論を語られたと聞いた時は、一同、大いに驚きました。合唱でバスを受け持つ私は、複雑な思いがします。が、実際に高い声域で書かれた『聖歌』によって、日本の福音的な諸教会が、半世紀以上に渡って養われてきたことを考えると、簡単に否定することもできません・・・。